

機上観測顛末記

渋谷 誠一郎

飛行機で高空に上がって日食を見れば、雲にじゃまされずに、きれいなコロナを見ることができると思う人は多い。私もそう思っていた。だから今回、KKコプティックが企画した（JTB主催）機上観測のツアーがあることを知り、これに参加を決めたのである。しかし、コロナを空の上で見るということは、どうしてどうして簡単なことではなかったのである。

◆あわや中止に

ちょうど出発の1か月前、旅行を主催しているJTBの担当者A氏から勤務先に電話が入った。その内容は、①人数が催行人員（16名）に満たないためこれを催行するには1人あたり10万円程度余計に出してもらうことになる。②だから中止することにした。③必要ならフィンツアーの方を紹介するからそちらで行ってほしい。④あなた以外のほとんどの人は、このことに納得した。といったことであった。

私としては、今回は機上観測以外は考えていないため、中止には全面的に納得できないので、なんとか復活することを要望した。

どうもこの段階でJTB側は、やる気がほとんどなくなっていたように思えるふしがある。のちに他の参加者から聞いたところによると、電話による意向の打診も、「行かないほうがいいのでは？」といった調子だったそうである。これでは、参加する方だって心配になるし、集まる人間も集まらなくなってしまう。予定の人数が集まらない場合は、積極的に動いて、実施できるよう努力するのが企業の姿勢というものだと思うのだが、逆にツブす努力をするとは…。ふしぎな業界である。

私はすぐに、コプティック（以下K社）に対して、善処を依頼する電話連絡した。すると驚いたことに、K社は中止になったことをまったく知らされていなくて、寝耳に水といった状況であった。今回の参加者のほとんどは、K社の広告によって応募した人たちであり、また、K社との関係によって光学メーカー等の協賛を得ている企画なのであるから、何の相談もなく中止というのではK社も怒るわけである。

スタッドモングの末、結局、11名の参加者で実施されることになったのであるが、一事が万事こんな具合で、ほんとうに今回の旅行は、心配ばかりしていた。成田をたつ直前まで、なにからなにまで不満であった。

◆情報の不足に悩む

今回の日食は、周知のとおり、フィンランド方面では、明け方すぐに皆既となり、本影が地

表に対して、極端に斜めに差し込んでくるため、雲を避けるために高く上がりすぎると、本影錐を突き抜けて部分食しか見えないということになりかねない。そんな状況なので高度はヨーエンス上空3～4500mと決めた。

ほんとうは、もっと高く上がりたいところであるが、そのためには、もっと東寄りのソ連領の近くまで行かなくてはならないため、この高さでがまんすることにした。チャーターしたサーブ340型機が、ジェット機に比べ高空性能の劣るターボプロップ機であったことも低高度飛行になった理由のひとつである。これらの、フライトプランの詳細は、K社の本間氏が作成したものであるが、そのうちの、いくつかの部分については私も、助言や情報提供を行い、決定していった。（このころから私は純粋な『客』ではなくなっていった。）

ただ、決めたのはよいが、現地の航空会社とはまったく連絡がつかない。JTBの方では、随時現地の代理店にFAXを流しているということであったが、回答がまったくといっていいほど来なかった。また、素人が考えた手前勝手な飛行ルートが、簡単に許可になるとも思えないので、現地の航空法規、規則等を入手したいと思い、照会を依頼したが、これもなしのツブテであった。

結局、現地で付く日本人ガイドに話を通しておくので、よろしくやってほしいということで、私たち参加者が、下駄を預けられた格好になってしまった。私は、なにか放り出されたような気持ちになって、おもしろくなかった。

実際のところ、現地ガイドにも、航空会社にも、私たちのフライトプランは伝わっていなかった。ただ、K社から出されていた要望に応じて、搭乗機の機長が観測前日に私たちのホテルまで出向いてくれて、細かいミーティングができたのはよかった。ここで直前にしてはじめて安心することができた。また、現地のガイド氏も、誠実な人だったので、だいぶ助かった。

◆雲に恨みは数々ござる

参加者11人を乗せたサーブ340型機は7月22日未明、快晴のヘルシンキ空港を離陸。しかし予定空域に近づくにつれて、しだいに雲が厚くなり、皆既20分前には、雲で上下をサンドイッチされた状態になってしまった。そこでやむをえず、高度を約6000mにまで上げたが、それでもかけた太陽のあるはずの東の空はまったく晴れず、結局コロナはまったく見る事ができなかった。皆既予定時間ころには、空がだいぶ暗くなり、本影錐が移動していくようすも、おぼろげながらにわかった。機長の厚意で、ヘルシンキ帰着前に、2度旋回をしてもらい、半分程度かけた太陽を見る事ができたのがせめてもの収穫だった。

なお、報道機関などがチャーターしたジェット機も10機程度は飛んだようで、これらの機はソ連国境近くの1万mもの高空を飛んだために、コロナを見る事ができたようである。皆既直前に、私たちの上空をたくさんのジェット機が、東に向かってものすごいスピードで飛んでいったのが、たいへん印象的であった。

◆備えなければ憂いばかり

このように、皆既日食の空中観測は決して容易なものではないのである。（とくに今回のような条件では）。ちょっとした思い付きや勢いで、最後まで乗り切れるほど、甘くはないと思っている。今回は旅行業者の動きの鈍さにイライラさせられどうしだった。また、実質的なオーガナイザーであるK社の力量不足ではないかと思受けられる部分もあった。また、『100%観測可能』などと大風呂敷を広げた文句を、広告にうたうのはいかがなものかとも感じた。

それにしても、日食観測の旅行というのは、それがうまくいったにしろ、ボショッタにしろ、どうして、いつもこんなに綱渡り的な目に遭わなくてはいけないのだろうか。これは、ひとえに、自分の日頃の行いの悪さゆえのことであろうか。

ともあれ、今後このようなリスクの大きいツアーを企画する場合は、それが旅行業者であろうと自主グループであろうと、じゅうぶんな情報収集と事前準備をして、腹をくくって実施すべきであることを痛感したのである。

* * *

さいわいに、旅行自体はたいへん楽しく、有意義な休暇を過ごすことができた。安くないカネを払って来たからには、徹底的に楽しまずには帰られようか、という一念で、私たちの心は一致していたにちがいない。ヘルシンキの美しい町なみや、それにもまして美しいプラチナブロードの女性たち。サーリセルカで見たミッドナイトサン。トナカイのステーキ。どれもこれも、簡単に忘れられるものですか。



機上観測メンバー（右端が筆者）